法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

先史時代の沖縄諸島

TAKAMIYA, Hiroe / 高宮, 廣衛

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
6
(開始ページ / Start Page)
163
(終了ページ / End Page)
200
(発行年 / Year)
1979-06-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00013094

先史時代の沖縄諸島

高宮廣衛

一

新聞その他で、すでに皆さんもご承知のことと思いますが、ここ数年、沖縄本島を中心とした地域では考古学上の新発見が相次いでおります。今日はそのような新事実を中心にお話し申し上げたいと思いますが、時間の都合で、宮古・八重山両諸島については割愛させていただきます。また、沖縄諸島に限定いたしましても、一〇〇分という時間では新資料のすべてをご紹介申し上げる余裕はございません。そこで、今回は新資料のうち特に編年に関するものをとりあげ、それらを中心に沖縄諸島の先史時代を概観してみたいと考えております。

まず、そのことをご了承いただき、そして話の順序といたしまして古い方の時代から見ていくこと

にいたします。

二

沖縄諸島でも洪積世という古い時代にすでに人類の生活が開始されておりました。洪積世と申しますと、約二〇〇万年前に始まり、およそ一万年前に終るとされる第四紀前半の地質時代を、そのように呼んでおります。そして、この時代は人類の歴史の上では最古の文化段階に属し、考古学で旧石器時代と呼んでいる時代であります。

旧石器時代の内容をもう少し具体的に申しますと、利器として石器を利用するわけですが、未だその石器を磨くことを知らず、したがって打ち欠いたままの、いわゆる打製石器を使用し、食料を獲得する手段としてはもっぱら狩猟や採集にたより、そして地質学でいう、今から一万年以前の洪積世という時代に属する石器文化、このように定義することができるでしょう。

一万年前の人類遺跡といいますと、沖縄諸島では現在のところ七、八か所知られております。主なものを挙げますと、まず、伊江島のカダバル洞穴、これは戦前発見された唯一の旧石器遺跡で、残りはすべて戦後発見されましたが、那覇市の山下町第一洞穴や具志頭村の港川遺跡などは戦後の代表的な遺跡といえます。カーボン・デイティング（放射性炭素年代測定法）によりますと山下町第一洞穴は

大体三万二千年くらい前、そして港川遺跡は約一万八千年前と考えられております。

これらの遺跡で僅かではありますが、人骨も発見されております。これらの人骨を研究ならっております東京大学名誉教授の鈴木尚博士によりますと、すべて新人段階のもので、それより古いものは含まれていないようであります。

化石人類は進化の程度によって、四段階に分けられております。一番古い形態を猿人、次が原人、三番目が旧人、そしてもっとも新しい段階のものを新人といっています。すでにご存じかと思いますが、猿人でいいますと、代表的なものはアフリカのオーストラロピテクス、原人では中国の北京原人あるいはジャワ（インドネシア）の直立原人、それから旧人にまいりますと有名なのはドイツのネアンデルタール人、新人ではフランスのクロマニヨン人がよく知られております。那覇市の山下洞穴や具志頭村の港川遺跡で発見された人骨は、この最後の段階の新人に属するということであります。新人は化石現生人類ともいわれ、私達現代人の直接の祖先、つまり最古の現代人というわけであります。

ところで、新人が旧人と交替するのは大体、四万年くらい前のようです。鈴木尚博士は山下洞穴発見の人骨に山下洞人、港川遺跡発見の人骨に港川人の名を与えました。山下洞人の時代は約三万二千年前ですから、新人と旧人の交替する四万年前に近い位置にあるわけで、新人としては世界的にも古い部類に属し、それだけに大変貴重な資料だといわれております。山下洞人が現在沖縄で確認されて

いる最古の人類で、そのほか新人の部類に属するであろうとみられているものに伊江島のカダバル洞人、宜野湾市の大山人、それから北谷の桃原洞人などがあります。

それでは、山下洞人などの洪積世人たちはどのような文化をもっていたか、彼らの残した遺物を通して、それを見てみたいと思います。まず、この種の遺跡が最初に発見されましたのは、昭和十一年、伊江島のカダバル洞穴においてであります。この洞穴には化石化した鹿の骨角片が層をなして堆積しており、地質学者の故徳永重康博士が調査を担当なさいまして、おびただしい量の骨角片を採集されました。これらの骨角片には石灰分が付着しておりまして、除去するのに二年もかかったようです。

伊江島の資料は早稲田大学に運ばれ、そこで研究が進められましたが、その結果、人為的加工を施したとみられる骨片が、何種類か検出されました。調査成果につきましては徳永重康・直良信夫両博士が、それぞれ別個に報告されております。お二人の報告を要約しますと、(1)掌骨の一端または両端を叉状に整形したもの、(2)下顎骨の先端を同じく叉状に造形したもの、(3)掌骨の神経孔を人為的に拡大し、その直上に両側から穿って一孔を設けたもの、(4)鹿角の先端をわずかに削ってとがらせたもの、(5)角座の部分を切りとって銅貨のように円形平板状にしたもの、などが含まれていたようであります。骨の先端を叉状に造形したものに、直良信夫博士は「叉状骨器」の名を与えました。

以上がカダバル洞穴の主な製品で、鹿骨角を素材としているところに大きな特徴があります。本遺跡では巴旦杏形の打製石器も一点発見されたということですが、輸送中に紛失してしまったようで、

したがって、石器であったかどうか確認されておりません。また、新石器時代のメルクマールである土器は一片も検出されなかったようです。

調査を担当された徳永博士は本遺跡の年代について、はっきりと洪積世とはいっておりませんが、(1)伊江島の鹿は日本・中国および他の東アジア地区の現存種と異ること、(2)今日の琉球には人為的に持込まれた以外の鹿は棲息していないこと、(3)琉球の貝塚（新石器時代）からは多量の猪骨が検出されるが、鹿骨は全く見当らないこと、などの理由から、貝塚時代よりかなり古いものであろうとの見解を表明されております。

類似の遺物が戦後、那覇市の山下町第一洞穴でも発見されております。山下洞穴では叉状骨器のほかに、鹿の角を両側から削って、ちょうど斧の刃のように加工した、われわれが斧刃状角器と呼んでいる遺物も発見されております。本遺跡では自然礫の一端を一面だけから加工して刃をつけた、いわゆるチョッパー状のもの一点のほか、拳大の石弾状の遺物も二点検出されております。いずれも第三紀砂岩という軟質の石を利用していまして、その点で、特にチョッパー状のものを利器とみるかは問題があるようです。

以上に述べた各遺跡出土の叉状骨器はいずれも叉状部に傷痕をもつラフなものですが、那覇市の嵩下原洞穴では叉状部を研磨した見事な製品が一点発見されています。

以上、カダバル洞穴と山下町第一洞穴の遺物を中心に概観いたしましたが、大きな特徴は骨角器と

呼ばれる遺物は報告されているが、確実な石器（利器）が発見されていないということであります。このように骨角器を優位とするところから、沖縄の洪積世文化を旧石器時代にみられる骨器文化に含める学者もいますが、骨角器を作るには石器が必要で、世界で知られている旧石器時代の骨器文化は普通二〇～三〇％の石器を伴っているといわれております。このように沖縄の洪積世文化は他の骨器文化とも様相を異にしており、特異だとされる所以であります。

ところで、昨年、筑波大学の加藤晋平教授が伊江島のゴヘズ洞穴を調査され、これまで、われわれが叉状骨器として取扱ってきた遺物は、実は人工品ではなく、動物が咬んだためにできた形態、つまり、自然遺物ではないか、という疑問を提出されました。

確かに動物の骨には自然の営力が働いたり、あるいは動物（齧歯類や肉食獣）の咬み痕が、あたかも人工品にみえることがしばしばあります。したがって、そのことには少なからず注意をはらい、山下町第一洞穴出土の骨角片についても、それに残る傷痕を古生物学者に検討してもらいました。その結果、齧歯類などによる咬傷痕ではないことが判明しましたので、伊江島例にならって人工品としたわけであります。

ところが加藤教授の今回の問題提起は齧歯類や肉食獣などではなく、鹿が自分の仲間を咬んだ結果生じた形態で、草食動物が骨を咬む例は外国にもあり、それを数例紹介されています。しかし、加藤教授も叉状骨片などにみられる傷痕を鹿の咬み痕だと断定しているわけではなく、その可能性の高い

ことを強調されているわけですが、他方、利器としての石器がほとんど見つかっていないことも疑問の根拠になっています。叉状骨器には嵩下原例のように研磨が加えられ、明らかに人工品と認められるものもあり、加藤教授が問題にされているような遺物が鹿による咬傷痕かどうか、今後検討してみる必要はあるでしょう。

なお、旧石器人の沖縄諸島への渡来について、かつては沖縄諸島が大陸と陸続きになっていた時代、つまり氷河期の陸橋を想定していましたが、最近の地質学の研究によりますと、沖縄諸島は洪積世の初期に大陸から切り離され、その後つながったことはないという見方が有力のようでありますから、海路による渡来の可能性も考慮に入れる必要がありましょう。

大体、以上が洪積世文化研究の現状であります。

三

さて、次は新石器時代に移りますが、洪積世の山下町第一洞穴や港川遺跡以後、ひじょうに長い空白の期間が続きまして、縄文後期（約三五〇〇年前）のころ、ようやく新石器時代文化が現われる、こういう考えが、つい数年前までの状況でありました。

新石器時代と申しますと、すでにご承知のこととは思いますが、ヨーロッパの概念では、動物の捕

獲、つまり狩猟が主な生業であった旧石器時代から、ある種の動物を家畜化し、またある種の植物を栽培するといった食料の生産の段階に入った文化を意味します。つまり、採集経済から生産経済へ移行したが未だ金属器を知らない石器時代の文化ということで、時代概念として社会経済史的視点が強く打ち出されております。また、遺跡から出土する遺物としましては煮炊き用の土器が普遍化し、そして石器を砥磨あるいは研磨する技術を習得する。つまり、磨製石器の出現ということであります。そのほか、巨石建造物とか運搬具あるいは織物の出現など、いろいろの特徴が挙げられますが、もっとも重要なことは採集経済から生産経済への移行という、一大転機のみられた時代ということであります。

それでは、わが国はどうかと申しますと、わが国の縄文時代も一般には新石器時代と呼ばれております。しかし、文化内容はヨーロッパの新石器時代と大きく異っております。

まず、農耕や牧畜の行なわれたことが証明されておりません。もっとも一部には縄文中期農耕論というものがあり、縄文時代中期の中部地方では簡単な、原始的な農耕が行なわれていたのではないかという想定もありますが、確実な証拠があってのことではありません。しかし、昨年から行なわれております福岡県板付遺跡の調査で、皆さんもすでにテレビその他でご存知のことと思いますけれども、縄文時代の終末には稲作が行なわれていたという事実が明らかになっております。しかし、だからといって縄文時代が当初から農耕社会だったということにはなりません。矢張り、狩猟・漁撈・採集段階の文化だということであります。しかしながら、煮沸用具としての土器をもち、また、磨製石器も

使用しております。そのようなことから、一般に縄文時代を新石器時代と呼んでおります。

では、沖縄諸島の場合はどうかといいますと、農耕牧畜がいつ開始されたか、まだおさえられておりません。しかし、縄文文化と同じく当初から土器をもち、そして磨製石器も認められます。そこで、これからお話する時代は、沖縄諸島で、土器や磨製石器が製作使用された時代というようにご理解いただきたいと思います。

ここ数年、沖縄諸島では、新石器時代に関する新事実がつぎつぎと明らかにされ、私ども関係者はその成果を追いかけるのに精一杯という状態であります。今日はそのような新事実のうち、先程申し上げました編年資料を中心に新石器時代を概観してみたいと思います。

そのうちの一つは読谷村渡具知東原遺跡の発見であります。先ほど新石器時代の上限は、つい数年前までは縄文後期に比定されていた、と申しましたが、渡具知東原遺跡の発見により、上限は一挙に更新され、縄文早期初頭、つまり草創期まで遡ることになったのであります。考古学では普通、時代や時期の移り変りを土器型式の変遷で示します。ここでも土器の推移を中心に、新石器文化がどのように進展していったかを見てみたいと思います。まず、編年表（第一表）について説明いたします。

その前に従来の編年研究をちょっとご紹介申し上げます。数年前までは沖縄諸島の新石器時代を前・中・後の三期に区分し、その上限を縄文後期に比定していました。ところが、一九七四年暮、渡具知東原遺跡で縄文前期の曾畑式土器が発見され、従来の編年の枠内ではとらえられなくなり、そのた

め急拠、前期の前に早期という一時期を設けまして、曾畑式土器を位置づけてまいりました。したがって、現行の編年表では早期・前期・中期・後期という四期区分になっております。しかし、この四期区分も実はすでに矛盾を抱えておりまして、この編年では、現在は不明ですが、将来発見されるであろう縄文中期の時期を表示することができないのです。

曾畑式土器の発見された翌年、渡具知東原遺跡では曾畑層の下の層から縄文前期よりもさらに古い爪形文系統の土器が発見され、現行編年の早期の前にあと一つ古い段階を設定せねばならなくなりました。もし、現行編年の早期の前に沖縄でも草創期を設定するとなりますと、草創期の内容は一致するものの、早期以降の本土と沖縄で、それぞれ異る文化階梯に同一の時期呼称を用いる箇所が何箇所か生じ、混乱を招きます。このような混乱をさけ、かつ文化の推移を現行編年よりもスムーズに表示しうる尺度として考案しましたのが第一表の編年表で、これは去る昭和五三年六月の沖縄考古学会研究発表会の席上、ご検討をお願いしたものであります。

ところで、この編年表も最終的なものではなく、現在のところ暫定的な、テンタティヴなものと私は考えておりますが、弥生文化波及の有無が確認できれば、恒久的な編年が可能になろうかと考えております。

沖縄諸島の新石器文化は縄文および弥生文化の変化によく対応しているように思えます。現行編年の修正にあたってはそこにポイントをおき、沖縄諸島発見の縄文および弥生式土器と現地のどの土器

第一表　沖縄諸島の編年

時期区分		土器型式	沖縄諸島発見の縄文・弥生式土器	その他の年代資料
前期	I	ヤブチ式土器 東原式土器	爪形文土器	ヤブチ式 6670±140y. B. P. 東原式 6450±140y. B. P.
	II	曾畑式土器 条痕文土器 室川下層式土器	曾畑式土器 条痕文土器	曾畑式（渡具知東原） 4880±130y. B. P.
	III	?		
	IV	伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式（熱田原） 3370±80y. B. P. 伊波式（室川） 3600±90y. B. P.
	V	室川上層式土器 宇佐浜式土器		宇佐浜式は黒川式並行とみられる
後期	I	?	板付II式 亀ノ甲類似土器	
	II	具志原式土器	山ノ口式土器	
	III	アカジャンガー式土器		アカジャンガー式は成川式並行とみられる
	IV	フェンサ下層式土器		類須恵器

が並行関係にあるか、それを表示したのが第一表の編年であります。

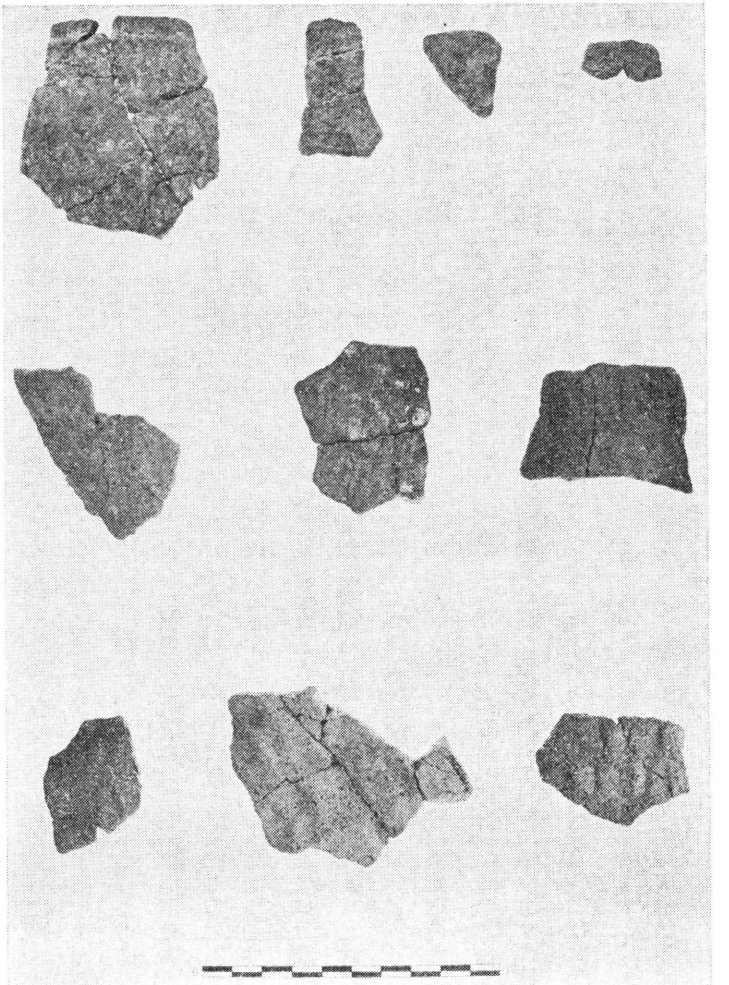
この表では新石器時代を大きく二つに分けております。前期と表示してあります部分は縄文時代に対応する時代であります。後期は弥生時代と、その下限を越えて存続した文化を含みます。そして前期を縄文の編年に従って五期に細分し、各期をそれぞれ前Ⅰ期……前Ⅴ期と呼ぶことにします。前Ⅰ期は早期、前Ⅱ期は前期……そして前Ⅴ期は晩期相当期であります。また、後Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期はそれぞれ弥生前・中・後の三期に対応するわけですが、沖縄では弥生の下限を越えて石器時代が存続しますので、この下限を越えた部分を後Ⅳ期とします。この編年表から、現在、縄文中期と弥生前期の部分が空欄になっていることが、お分り頂けると思います。この二つの時期がどうなっていたか、現在のところ全く不明です。沖縄諸島の新石器時代が縄文土器で開始されることは前に述べた通りであります。しかし、時代の推移とともに次第に地域性を強めていく。この地域性の強化が、そのまま後世の固有文化につながっていくのか、あるいは弥生文化の波及によって、もう一度九州と同一の文化圏に組み込まれ、その後ある時期にまた九州圏を離れ、独自の文化を形成していくのか、この辺の事情が現在のところ全く分らないのであります。弥生文化波及の有無が判明すれば、恒久的な編年が可能であろうと、先ほど申し上げましたのは、この辺の事情を申し上げたわけであります。それでは次に、土器の変遷を中心に文化内容をもう少し具体的に検討してみたいと思います。

まず、前Ⅰ期ですが、縄文早期初頭、あるいは草創期にあたる時期で、ヤブチ式土器と東原式土器

の二型式があります。渡具知東原の出土例でみますと、ヤブチ式が下層から、そして東原式がその上の層から出土しまして、両者の先後関係が決定したわけであります。つまり、下層のヤブチ式が古く、上位の東原式がそれに後続するということであります。この二型式の土器は本県以外では一括して爪形文土器と呼ばれております。それは本県以外では出土資料が少なく、細分編年が困難だという状況によりますが、本県の渡具知東原では多量の資料が得られ、しかも層位的にも時間差のあることが確認できたわけで爪形文土器研究を一歩前進させたといえます。

ヤブチ式土器は、勝連半島の北岸に接して藪地島という石灰岩の小島がありますが、この島の小洞窟内で、十八年ほど前の一九六〇年、国分直一教授と興南高校の嵩元政秀先生によって初めて発見された土器で、数年後、今度は奄美本島のヤーヤ洞窟遺跡でも発見されております。しかし、その後、渡具知東原で発見されるまで、ほとんど発見報告がなく、また、この土器が従来知られていた沖縄の土器とは著しく特徴を異にしていまして、一体どの系統の土器か、全く謎につつまれた土器でした。また、編年上の位置も明確さを欠き、そのため取扱いに長年困惑していたのであります。渡具知東原遺跡の発掘調査で、ヤブチ式土器が沖縄における現在の最古の土器であることが分ったのであります。ヤブチ式の呼び名は藪地島に由来しております。

この土器の特徴は器壁がひじょうに薄く、三〜五ミリの厚さしかなく、土器の表面に指頭押圧文という、指頭で器面を軽く押えつけますと器面に浅い凹凸ができます。それを指頭押圧文土器（第一図版）



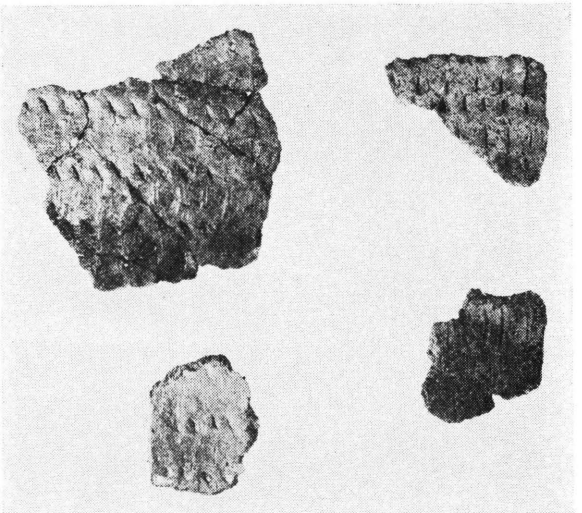
第１図版　ヤブチ式土器

と呼んでおりますが、そのような文様を器面全体に施している。表面だけでなく、中には内面に押圧したのも見受けられます。また、部分的に真正の爪を押圧した文様もあります。この土器の形――これを器形といっていますが――器形は深鉢形で尖り底である。つまり深鉢形尖底の土器ということであります。この土器には煤の付着したものがありますから、煮沸用器として使用されたことは間違いありません。

ヤブチ型の土器の分布を見てみますと、沖縄諸島では、まず藪地島で発見され、次いで渡具知東原の最下層、そして北へいきますと奄美大島のヤーヤ洞窟、さらに北にまいりますと、福岡県に門田という遺跡がありまして、そこでも発見されております。現在のところ、以上のような分布を示していまして、北は福岡、南は奄美・沖縄というように南北両端の地域で発見が報ぜられ、中間地帯が空白になっているわけです。今後、中間空白地帯は埋っていくと思いますけれども、あるいはもうすでに発見されているかも知れませんが、私の手許にある資料では以上の地域で確認されております。

ヤブチ式土器に後続するのが東原(あがりはら)式土器で、渡具知東原遺跡出土の土器を標式として命名した土器です。この土器も器形は先ほどのヤブチ式と大体似ておりまして、深鉢形の尖底を想定しておりますけれども、指頭押圧文の代りに、今度はヘラで爪形文を描くという特徴をもっております。指頭押圧文からヘラ描きの爪形文への移行過程が、東原の資料でおさえられそうであります。

それではこれらの土器にどのような石器が伴うか、文化の性格を知る上で伴出石器の研究は大変重



第2図版　東原式土器

要であります。しかし残念ながら、渡具知東原では石器の出土量がきわめて少なく、その様子が十分摑めたとは申せません。第一・二次調査の資料によりますと、ヤブチ式に伴う石器として撥形の局部磨製の石斧が一点確認されております。局部磨製石斧と申しますのは斧の刃の部分だけを研磨し、他の部分を打製のまま放置する石斧のことをいいます。この局部磨製石斧は現在のところ、沖縄における新石器時代最古の石器といえます。

東原式に伴う石器は種類が少し増加しております。大型の打製石斧二点、チャート製のスクレィパー一点、同石核一点、そして磨り石と考えられる遺物が二点検出されております。チャートという石は打割って取り出した破片の縁辺が、そのまま鋭利な刃部ともなりうるもので、剥片のまま特に加工することなしに石器に使えるという特徴をもち、沖縄での産地は伊平屋、伊是名、伊江島のほか本部半島に限られており、それ以外の地域で

チャートが発見されれば、それは交易によってもたらされたものと考えられます。スクレィパーは毛皮を剝いだり、あるいは脂肪を取り除くのに使用されたと考えられる小型の石器で、日本語では掻器と訳されています。磨り石は物を磨り潰すための道具と考えられております。第一・二次調査で得られた石器は以上のように僅少ですが、当初から局部磨製石斧や打製石斧を伴っているところに大きな特徴があるように思われます。

東原式土器の分布を見てみますと、沖縄諸島では渡具知東原遺跡のほか、嘉手納飛行場に西接する野国貝塚のB地点と呼ばれている地域でも若干発見されております。このタイプの土器はわが国ではひじょうに大きな分布圏をもっておりまして、北は山形県でも数遺跡が知られ、西へいきますと長崎県の福井洞穴や泉福寺洞穴遺跡、南へまいりますと鹿児島県では上場遺跡が有名で、爪形文土器の南限とされていましたが、渡具知東原での発見で、さらに南下していることが分ったわけであります。この土器の確認された遺跡は、現在では全国で四〇か所以上にのぼっているようであります。

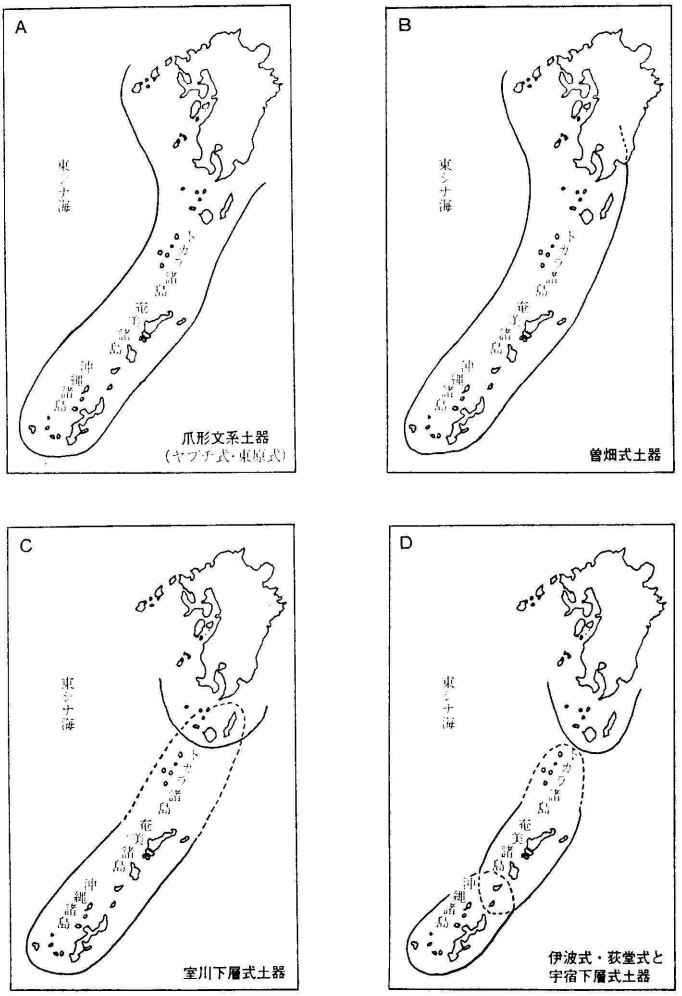
爪形文土器は広範な分布圏をもつ土器でありますから、これに随伴する石器も地域により、また時代により異っております。長崎県の福井洞穴遺跡や泉福寺遺跡ではこの土器は細石刃という石器を伴っております。細石刃と申しますのはひじょうに小さな石器で細石器の仲間に属するものですが、大きさはどのくらいかといいますと、大体幅が二〜四ミリ、長さが二〜四センチの長方形の石器で、あまり小さいので単独では使用しにくい。それで棒だとか動物の角などに溝を彫り、そこにはめこみ、

樹脂かタールかで固定して使用する。単数でなく、ふつう複数（五～十個）はめこんで使用しますので、組合わせ道具、あるいはコンポジット・トゥールとも呼ばれております。

細石刃という石器はわが国では旧石器時代の終りのころに現われます。ヨーロッパでも旧石器時代終末のころ――この時代を中石器時代といっておりますが――その時代に細石器が現われる。細石器も小型石器の一種で、コンポジット・トゥールですが、台形・三角形・半月形など幾何学的形態に特色があり、その点で細石刃と異るわけですが、とに角、アジアにきますと中国、旧満州あたりから日本へかけて、この細石刃が分布する。つまり旧石器時代の終りのころ、形態こそ違いますが、小型の石器がヨーロッパからアジアにかけて行なわれていたことになります。

わが国における土器の出現は、このように旧石器終末期の細石刃文化の中に認められるということを、長崎県の福井洞穴遺跡や泉福寺洞穴は示しております。しかし、本州では爪形文土器に石鏃の伴う例が知られております。石鏃はわが国では縄文文化を代表する石器の一つといわれるように、旧石器以後に現われる石器であります。つまり、本州では石鏃出現のころまで、爪形文土器が行なわれていたことになります。また、鹿児島県の出水地方の遺跡でも爪形文土器は石鏃のみられる時期まで存続していたようであります。このように石器との共伴関係でみますと、爪形文土器はまず、九州西北部の細石刃文化の中に起り、次第に東漸あるいは南漸していったのだろうと考えられるのであります。

この爪形文土器がさらに南下して沖縄諸島にくるわけですけれども、沖縄諸島では先程話しました



第1図　主要土器分布図（点線は分布を想定）

ように局部磨製石斧や打製石斧などを伴っており、石鏃も細石刃も発見されておりません。局部磨製石斧や打製石斧を伴うということが、時代差を示すのか、あるいは地域差を示すのか、今のところ未だ分っていません。

局部磨製石斧はわが国では古い石斧に属し、後期旧石器時代にすでに登場しております。旧石器時代における出土例をみてみますと、関東・中部・北陸あたりに集中し、東北・北海道などでもわずかながら出土が知られていますが、西日本での発見報告はありません。中部・北陸地方と沖縄とでは距離があり過ぎ、しかも時代も異りますので、現段階では直接比較はできないように思います。最近、南九州の旧石器終末期の遺跡で局部磨製石器が出土したらしいと聞いておりますが、報告書が未だ出ていませんので、比較できる段階にありません。このように渡具知東原遺跡で爪形文土器に伴って発見される局部磨製石斧が、旧石器後期の局部磨製石斧と関係があるかどうか分っていないのであります。あるいは東南アジアのバクソニアン文化などとの検討も必要かもしれません。

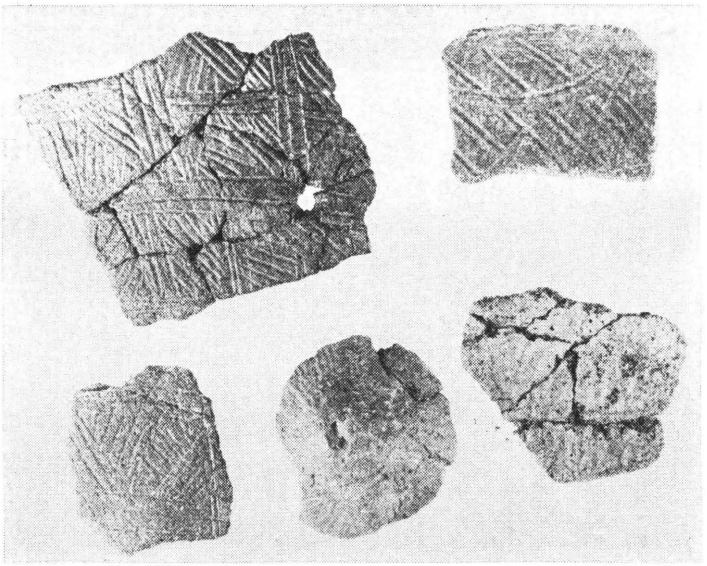
余談になりますが、爪形文土器は先程話しました長崎県の福井洞穴遺跡では隆線文土器に後続することが確かめられておりますが、同県の泉福寺洞穴遺跡では隆線文土器の下層から、さらに古い、豆粒(つぶ)状の粘土を貼付した土器——これを豆粒文(とうりゅうもん)土器といっていますが——が発見され、これが現在、わが国で一番古い土器ということになっております。次が隆線文土器、そして三番目が爪形文土器で、この土器が沖縄諸島にも分布しているということであります。つまり、縄文早期初頭（草創期）のこ

ろすでに南島航路が開け、先史人たちは九州―沖縄間を往復していたのであります。実年代にしておおよそ七〇〇〇年以前のことであります。

さて、渡具知東原遺跡の一番上の文化層では曾畑式土器が検出されております。この土器は西九州縄文前期を代表する土器で、熊本県の曾畑貝塚で最初に発見され、その型式名が与えられております。この土器は主として西九州に分布し、東九州にはあまり浸透しない。しかしながら、南島では沖縄諸島まで分布している。この土器は、また朝鮮半島の櫛目文土器とも関係があると考えられております。そうすると朝鮮半島から九州西部を経て沖縄諸島まで分布する土器ということになり、一五〇〇キロもの水域を往復するグループのあったことが推察されます。漁撈を生業とする人たちではなかったかと思います。

曾畑式土器に伴う石器は渡具知東原遺跡でも比較的豊富でした。本遺跡の石器の状況は、種子島や屋久島の曾畑遺跡の状況にもっともよく似ております。曾畑式土器についてみますと、例えば丸平の底部が渡具知東原ではみられないといったように南九州と沖縄とでは、多少相違点も認められます。しかし、石器の組成はほぼ一致しているように思われます。現在のところ、土器・石器の状況がともに九州と一致するのはこの時期に限られているようであります。

曾畑式土器は三期に分けられております。第一期の曾畑式土器は九州西北部に局地的にみられるもので、曾畑式土器の中ではもっとも古いものとされております。文様は直線や列点などによる幾何学



第3図版　渡具知東原曾畑層の土器

文に終始し、整然と規則正しく配列されるところに特色があり、曲線文を含みません。滑石を胎土に混入することも特徴の一つに数えられております。第二期は幾何学文にみだれの生ずる時期とされ、また、最大の分布圏を描いた時代ともいわれております。第三期は曲線文の現われる時期で、文様も簡略化したものが多いようであります。渡具知東原の曾畑式土器は第二期に比定されるようで、したがって南下要素と考えられるわけであります。

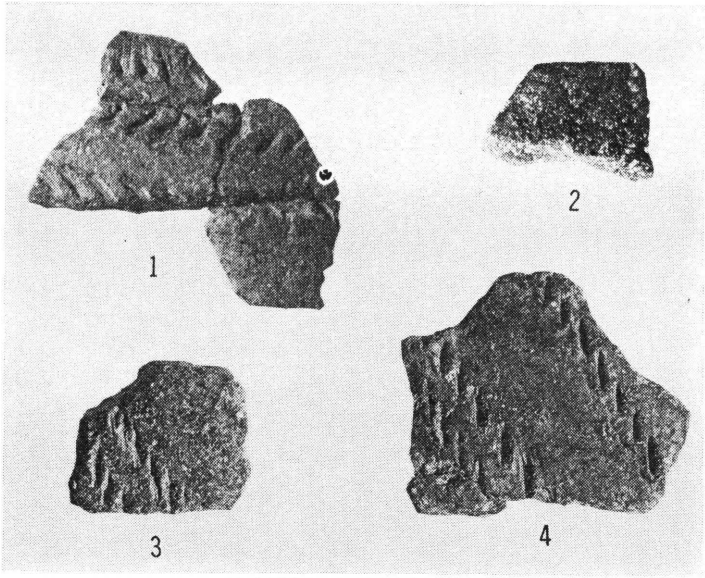
曾畑式土器にはふつう条痕文土器が伴うといわれております。条痕文土器と申しますのは土器の器面を二枚貝の腹縁で引っ掻いて粗い条痕をつけた土器を、そのように呼んでおります。条痕文といいますが、文

様というよりはむしろ器面の調整痕といった方が妥当でしょう。九州では曾畑式土器を出土する遺跡では大抵条痕文土器がみられるということで、同様の状況が渡具知東原でも認められるわけであります。土器の様子といい、石器の状況といい、渡具知東原上層は曾畑式文化圏に包摂されているとみていいでしょう。

四

沖縄市役所の東北側崖下に室川貝塚という遺跡があります。直線距離で太平洋岸まで約三キロ、東シナ海まで約五キロ、内陸部の遺跡ですけれども、どちらかといえば太平洋岸に近い位置にあります。時期は第一表の前Ⅳ〜Ⅴ期を主体としておりますが、最下層の地山で新型式の土器が発見されました。これが室川下層式土器です。この土器はいろいろの点で渡具知東原の曾畑式土器に似ております。しかし、施文手法が著しく異っております。

この土器の文様は口縁部では口縁にそって水平方向に施文し、以下の胴部では斜め方向に施文するという特徴をもっております。この種の土器の完形品は未だ見つかっておりません。しかし、破片は数遺跡で報告されております。この土器は渡具知東原の曾畑層でも若干検出されております。そのことから曾畑式に後続する型式とみられ、縄文前期末に位置付けられるかと考えております。



第4図版　室川下層式土器

室川下層式土器は沖縄本島内陸部発見の土器としては、現在のところ最古の土器であります。曾畑式土器は九州でも沖縄でも海岸地域に分布するという特徴をもっております。両土器のこのような分布関係をみますと、沖縄本島では曾畑式に続く時期、すなわち室川下層式の時期に内陸部への移動が開始されたのではないかと推察されるのであります。

それでは室川貝塚の場合、どの海岸から内陸部へ向って出発したかと申しますと、現在のところ全くの想像ですが、距離的には遠いけれども、東シナ海の渡具知東原遺跡は基地としては有力な候補の一つではないだろうかと考えております。東海岸（太平洋）は距離的には確かに近い。しかし、

泡瀬海岸一帯はジャーガル（シルト質泥岩）地帯で、遺跡の乏しい所であり、縄文時代に比定されるような遺跡は発見されておりません。地形的見地からすれば、今後も発見の可能性は薄いように思われます。このような状況から距離的には遠いけれども渡具知東原を有力な候補地とみるわけであります。

では次に、東シナ海から五キロ奥の室川貝塚にたどり着くのにどのようなルートを利用したか、これも全くの想像に過ぎませんが、おそらく当時は本島全体がジャングルで被われていたのでありましょう。そこで私は河川の利用というものを考えているわけであります。室川貝塚の東北方を比謝川の支流であるハンザ川が西流しております。この川は知花城の西を迂回して東シナ海に注ぎますが、渡具知東原など比謝川河口の先史人たちはこの川を利用して内陸部開発を行ったのではないか。ジャングルに被われた陸路を開発するよりは当初河川がいろいろの点で安全で便利ではなかったかと想像いたしております。

室川下層式に含めてよいと考えられる土器は奄美諸島やトカラ列島でも発見されております。トカラ以南が一つの文化圏を構成するのは間違いないようですが、この土器の北限は明瞭ではありません。最近、室川下層類似の土器が種子島の下剥峯遺跡でも数例発見されておりまして、種子島もあるいはこの土器の分布圏に含まれるかと想像いたしております。室川下層式土器あるいは類似の土器は九州本土ではまだ報告されていないようであります。この状況を第一図Cに示してみましたが、もし室川

下層式の北限が薩南諸島であれば、南島地域が九州本土圏から離れるのは室川下層式以後ということになります。とにかく、今後、室川下層式土器の分布に注意したいと思います。この土器の特徴からすれば、九州本土で出土してもおかしくはないように思われます。

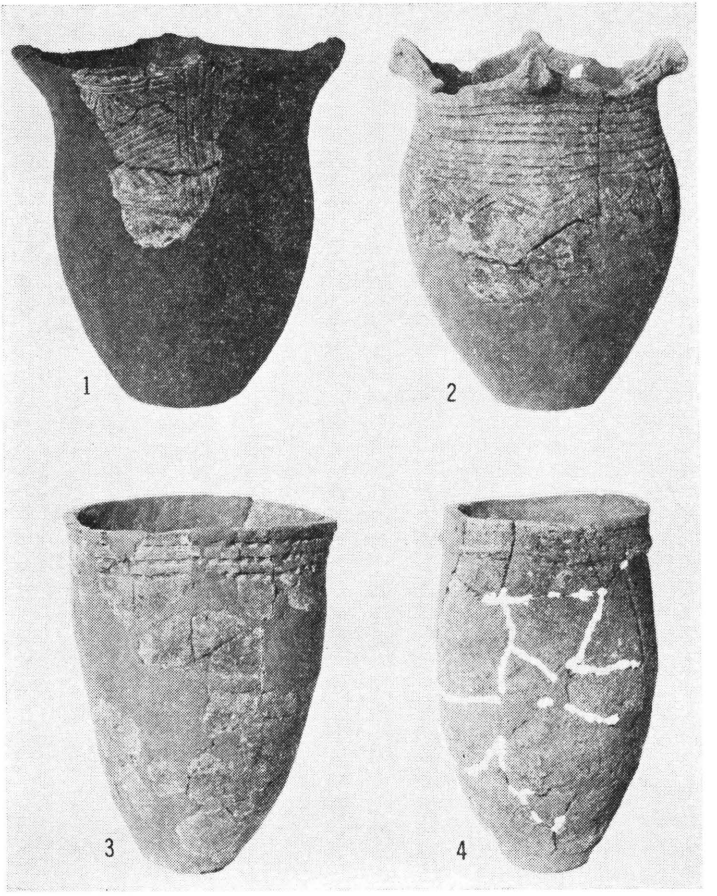
前Ⅲ期は第一表の編年表では、クェスチョン・マークがついております。縄文中期に対比される時期です。この時期の様子は皆目不明です。このことは沖縄諸島だけでなく、奄美・トカラ諸島も、そして北の種子島や屋久島でもこの時期は不明で、南島全体が空白になっているのであります。種子島や屋久島における縄文中期文化の欠落について、種子島ご出身の盛園尚孝氏は火山活動との関係で説明しておられます。すなわち、縄文中期の南九州は火山活動が活発で、そのため種子島や屋久島など人類が生活できる状態になく、後期人の九州本土からの南下もなかった。種子島におけるその頃の遺跡をみますと、縄文前期層の上に一メートル前後の厚い火山灰層がのり、その上に縄文後期の文化層がのっている。つまり、縄文中期に当る部分が火山灰層というわけであります。遺跡におけるそのような火山灰の堆積状況から中期には人類が住めなかったのではないか、という見解を出されたのであります。

ところで、わが沖縄諸島は火山とは関係のない地域であります。それで、縄文前期以降も生活は中断することなく、この島嶼地域では人類の生活が連綿と続いていたと考えるわけであります。おそらく今後の調査により中期遺跡が発見されるものと期待しております。

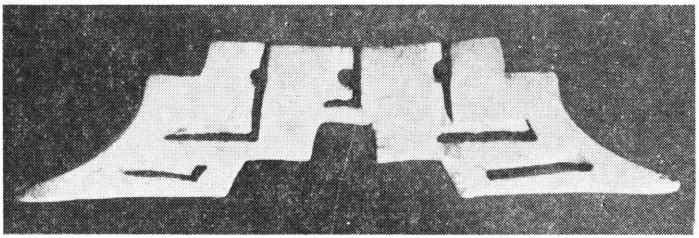
五

さて、前Ⅳ期の時期（縄文後期）になりますと、第一表のような四型式の土器によって代表されます。まだ他に数型式ありますけれども、一応代表的なものとしてこの四型式を挙げておきました。伊波式・荻堂式・大山式・室川式の四型式は沖縄諸島にだけ分布し、北の奄美諸島では未発見であります。このような分布状況から、これら四型式の土器は地域性のきわめて強い土器といえます。当時の奄美諸島は宇宿下層式土器と汎称される独自の土器をもっており、近年、この系統の土器の発見例が沖縄諸島では増加しつつありますが、沖縄の前記四型式土器の発見例が奄美諸島では皆無です。とに角、この時期の奄美・沖縄両諸島はそれぞれ独自の土器をもち、最小の文化圏を形成していたものと思われます（第一図D）。しかし、土器自体は波状口縁が支配的で、依然として縄文的雰囲気の中にあるといっていいかと思います。

ところで、沖縄・奄美両諸島は当初から同一の文化圏を構成していたであろうと考えられます。最古のヤブチ式土器・縄文前期の曾畑式土器は共通に存在し、縄文中期の様子は先程のように不明ですが、晩期でも類似の土器が両諸島に分布しています。ただ後期の時期だけ、それぞれ独自の土器をもっているわけです。どうしてこの時期だけ異っているのか、原因はまだ分っておりません。先程も話しましたようにこの時期の奄美土器の発見例は沖縄側では増加しております。沖縄の土器が奄美に及



第5図版　1.　伊波式　2. 荻堂式　3.　大山式
4.　カヤウチバンタ式



第6図版　骨製装身具（室川貝塚出土）

んでいないかどうか、奄美での発見に期待しております。

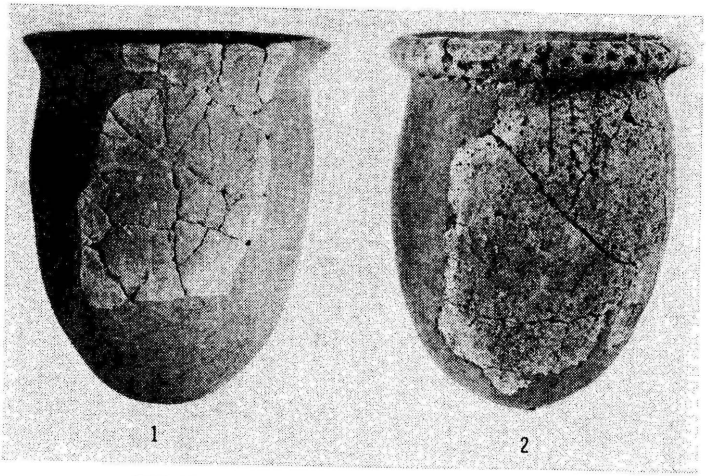
前Ⅳ期について語るとき、どうしてもふれなければならない遺物があります。この時期に貝殻や動物の骨を利用したファンタスティックな装身具が流行するのです。第六図版はその一例ですが、一見したところ三五〇〇年前のものとは思えないほど精巧なもので、現在のスーベニヤ・ストアでも通用しそうな製品です。私たちはこの種の製品を一応、装身具として取扱っています。しかし、ただ単に装飾という機能に終始したわけではなく、それ以上の意味をもっていたろうと推察しております。

この種の製品の中には動物の形を示す写実的なものもあります。しかし、大部分はひじょうに抽象化されており、奇怪な形象を示すものが多いのです。この奇怪な形象は実は獣形や竜形を示すといわれ、中国の青銅器にみられる饕餮文に由来すると考えられております。そうであれば中国との関係を示す最古の資料ということになります。この種の装身具は現在のところ奄美・沖縄両諸島に分布は限られているようです。もっとも、新らしい時代になりますと、種子島あたりにも中国との関係を示す資料が見受けられます。この種の貝製・骨製獣形装身具が中国の饕餮

文に由来するものであれば、当然、中国大陸との交流についても考えねばなりません。縄文後期という古い時代に、一体どのような交流が東シナ海をはさんで行なわれていたか。当時沖縄側に東シナ海を横断する技術があったか、今後の大きな研究課題の一つであります。

さて、縄文晩期に対比される前V期の時期になりますと、沖縄諸島では宇佐浜式土器、奄美諸島では宇宿上層式土器が行なわれます。この二型式の土器は口縁部の断面が三角形あるいはカマボコ状に肥厚するという特徴をもっており、そのことから同一系統の土器と考えられます。相違は宇宿上層式の製作が入念であるのに対し、宇佐浜式土器は粗造という印象を受けます。奄美の宇宿上層式土器はトカラ列島に及んでいることが分っています。しかし、屋久島や種子島に及んだかどうかは不明です。以上のことから第二図Aのようにトカラ～沖縄間を一つの文化圏と見なしていいのではないかと考えています。

この時期の遺跡は台地上、あるいはそれにつらなる緩斜面上の開地に立地し、近年、竪穴住居址の発見例も増加しつつあります。しかし、住居址の完全な形での発見例は少く、未だ一般化して理解できる段階にないのですが、今後、類例の増加によって住居空間の利用の仕方など分ってくるものと思われます。また、この時期に開地への移動が行なわれますが、このことは経済問題と関係があるのではないかと推察しておりますけれども、果して原始農耕を行なっていたかどうか、まだそれを実証、ないしは推定させる資料は発見されておりません。しかし、焼畑農耕の可能性など考えてみる必要が



第7図版　1.　室川式土器　2.　室川上層式土器

あるかもしれません。

沖縄ではひじょうに珍しいとされている石鏃が、この時期に少々みられるようになります。石鏃と申しますのは矢の先につける小型三角形のポイントで、石鏃がみつかれば弓矢のあったことが分ります。弓矢は飛び道具ですから比較的距離のある獲物をとらえることができます。弓矢の出現によって狩猟が著しく進歩したといわれております。

石鏃は先程も話しましたように縄文文化を特徴づける石器の一つとして最初から登場し、以後ずっと使用されます。しかし、沖縄では発見が稀で、最近の調査によりこの時期に幾らか一般化しそうだということが分りかけてきました。

前V期は開地への進出、その他の状況から、一部に原始農耕が行なわれていたのではないか、という疑いももたれていますが、他方、石鏃の普遍化は狩猟にか

なりウェイトを置いた文化ともとれます。この時期にだけ石鏃が流行するのはなぜか、この点も今後解明しなくてはならないでしょう。

六

弥生文化といいますと、私たちは直ぐ水稲耕作に基づく農耕社会を思い出します。沖縄諸島でいつ稲作農耕が開始されたか、これは沖縄の歴史を考える際、大変重要な問題であります。弥生文化は、ご承知のように北部九州に始まり、そして本州を次第に東漸していったのでありますが、この文化が九州を南下して沖縄諸島に及んだかどうか、大変興味ある問題であります。しかし沖縄諸島への波及は未だ確認されておりません。

第一表の後Ⅰ期は弥生前期に対応する時期を考えております。沖縄諸島では弥生前期土器、たとえば板付Ⅱ式や現地製の亀の甲類似土器などが発見され、弥生文化波及の可能性を示していますが、発見が散発的なため、それらの資料が弥生前期文化の定着を暗示しているのか、あるいは単に弥生文化の一要素が断片的に伝わったことを意味しているのか、未だよく分っておりません。つまり、それらに対比される沖縄現地の土器があるのかどうか、分っていないのです。そのため第一表の前期を空欄にし、第二図Bでは沖縄諸島の箇所に？を付したわけであります。

昨年、奄美本島のサウチ遺跡が調査されまして、その結果、弥生前・中期文化が奄美本島に定着していたことが分りました。発掘を担当された河口貞徳氏のご報告によりますと、サウチ遺跡における弥生前期文化は九州からの移入土器で構成され、中期になりますと移入土器もありますが、現地製の弥生土器が出現し、後期の段階では完全に地域化した兼久式土器へと転じている。炭化米など稲作を実証する資料は未発見のようですが遺跡周辺の地形・自然環境の状況から河口氏は稲作を行なっていたろうと推察していらっしゃいます。

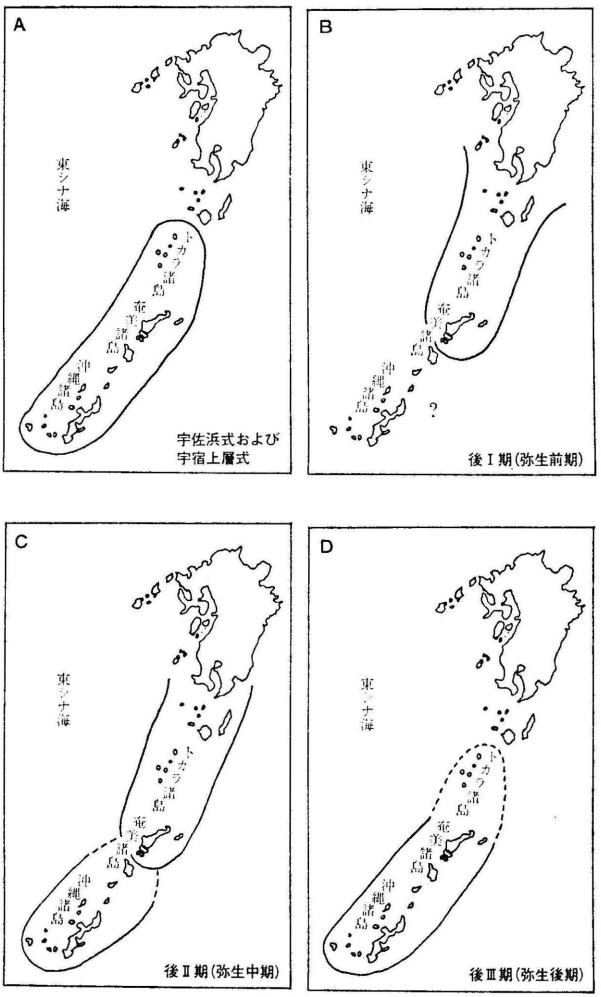
前にも話しましたように沖縄諸島では弥生文化が定着したかどうか確められておりません。しかし、読谷村の渡具知木綿原における箱式石棺およびそれに随伴したとみられる弥生前期土器の発見など弥生関係の資料は徐々に増加しつつあり、また、奄美と沖縄間の地理的距離を考えます場合、沖縄諸島への波及の可能性も十分予想されるのであります。

南九州の弥生中期を代表する土器に山ノ口式というのがあります。汎九州的な広がりをもつ須玖式土器の南九州型と考えられている土器であります。この土器は終戦直後から奄美や沖縄諸島で発見が報ぜられ、弥生期における九州との交流を示す最古の資料として重視されてまいりました。しかし、近年の調査研究により、弥生前期にすでに交渉のあったことが分ったのでありますが、この山ノ口式土器は奄美、沖縄両諸島では広域に分布し、また、南下弥生式土器の中では発見例のもっとも多い土器でもあります。

山ノ口式土器の層位的発見例として確実なものは、沖縄諸島では伊江島のナガラ原貝塚であります。琉球大学の故友寄英一郎教授によって調査された遺跡で、第一次発掘調査の際、五枚の層が確認されましたが、この貝塚の中層（第Ⅳ・Ⅴ層）で山ノ口式土器が二〇数片検出されております。これは沖縄での発見例としましては比較的まとまった資料であります。しかしながら、この同じ層から沖縄現地製の土器が、破片の数でみますと数千点というおびただしい量が検出されております。移入土器としての山ノ口式土器はこの層では一％にも満たない量であります。両者のこのような量的関係をみますと、山ノ口式土器が移入されたころ、沖縄現地ではすでに独自の土器をもっていたといえそうであります。この二型式土器の特徴は明瞭で、容易に区別できます。ナガラ原貝塚におけるこのような出土状況から、弥生文化の波及があったにしても九州と同一の様相を呈する期間はきわめて短く、前期だけに限られる可能性があり、中期の段階ではすでに独自の土器をもっておったと考えられ、地域化が進行していたのではないかと推察されるわけであります。その辺の状況を想定しましたのが第二図Ｃであります。現在のところ、山ノ口式土器の層位的発見例は伊江島のナガラ原だけに限られており、この貝塚の状況を中心に当時の様子を想像したわけですけれども、今後発見例が増加すれば、中期の様子ももっと具体的に把握できるようになるでしょう。

弥生後期の状況も現在のところ明確ではございません。第一表の後Ⅲ期の時期です。沖縄ではアカジャンガー式土器が後Ⅲ期の終末に位置づけられるのではないかと推察しております。アカジャンガ

ー式土器は奄美の兼久式土器に器形・文様ともよく似ております。同一型式の範疇に入れていい土器とみていますが、強いて相違を探しますと、兼久式土器の底部外面にはほとんど例外なく木葉圧痕が



第2図　主要土器分布図（点線は分布を想定）

施されている。この木葉圧痕は成川式の影響であろうと河口氏はいっておられます。このような木葉圧痕はアカジャンガー式には認められません。これが相違といえば相違になるかと思います。それ以外はひじょうによく似ているわけであります。

アカジャンガー式および兼久式土器は南九州の成川式並行の土器と考えられます。成川式土器は弥生終末期の土器といわれ、鹿児島県成川遺跡では鉄鏃との共伴関係が確められております。弥生の終末は普通三世紀といわれておりますけれども、成川遺跡の状況は五世紀中葉の状況を呈しております。南九州において、このように弥生の終末はすでにずれているわけであります。しかし、最近の調査によりますと、下限はもっとずれそうであります。数年前行なわれました薩摩半島の入来遺跡の調査結果では、成川式土器は六世紀中ごろの須恵器と共存することが確かで、同じく鹿児島県荻原遺跡の調査では六世紀中葉以後に存続する可能性が指摘されております。沖縄のアカジャンガー式土器が、この成川式並行の土器であれば六世紀後半に位置付けても大過なかろうと考えております。北部九州の編年でいけば、すでに弥生の下限を越えているわけであります。

第一表における後Ⅲ期から後Ⅳ期への移行がどのように行なわれたか、具体的にはおさえられておりません。後Ⅲ期は北部九州の基準からすれば先程のように弥生の下限を越えているわけですけれども、一応、南九州の成川式並行の時期と考えられます。したがって、後Ⅳ期は成川式以後の石器時代ということになり、六世紀後半から九世紀前後の期間を考えております。そして下限をフェンサ下層

式の時期においているわけであります。

フェンサ城貝塚という遺跡は糸満市名城にありまして、一九五九年、多和田真淳氏によって発見され、一九六七年、友寄英一郎・嵩元政秀両氏によって発掘調査が実施されました。その結果、二枚の貝層が認められ、それぞれ特徴の異る土器を出土しております。下層で発見される土器は貝塚土器の延長線上にあり、原始時代の土器と見て差支えないと思います。この層の土器は無文のものが多く、たとえ文様を施すにしてもきわめて簡略化したものに限られ、無文化の著しく進んだ土器といえます。この種の土器をフェンサ下層式土器と呼んでおります。この時期に沖縄では初めて須恵器が現われますが、この須恵器が平安初期のものに近似しているということで、石器時代の終末を平安初期ごろにおいているわけであります。

フェンサ上層から検出されます土器は焼きもきわめて良く、器形も下層のものとは異り、様相が一変しております。そして上層の土器には須恵器も伴出しますが、中国製の陶磁器を伴っていることが著しい特徴でしょう。これらの陶磁器から上層は南宋〜明初の時代を示しているといわれます。また、諸種の遺物のあり方から、フェンサ上層は按司の時代に入っていることを物語っていると考えられております。

フェンサ城貝塚の上層と下層とではこのように土器だけでなく、伴出遺物も大きく異っていて、両者の間に大きな変化のあったことが推知されるのであります。この両層の相違は沖縄諸島の歴史が原

始社会から階級社会へ移行したことを示しているとみられますが、この交替がどのようにして行なわれたか、未だ具体的にはおさえられてはおりません。今後の大きな課題として残されております。

さて、新発見の土器を中心に新石器時代の様子について大雑把にまとめてみましたが、時間の都合上、大急ぎで説明いたしましたため、省略を余儀なくされた部分も多く、果してご理解いただけたかどうか、もう一度まとめてみますと、縄文早期土器で開始される新石器文化が前期末か中期のころ、九州圏を離れ地域性の強い土器へと変っていく。この地域性の強い土器が後世の固有文化を生み出していくのか、あるいは、奄美のサウチ遺跡におけるように弥生文化の波及があって、再び九州圏に組み込まれるのか、その辺は未だ分っておりませんが、弥生中期の段階では南島型の独自の土器をもっていたと考えられることから、弥生文化の波及があったとしても、九州と相似の様相を呈するのはごく限られた期間、すなわち前期の期間だけではなかったかと想像しているわけであります。

とにかく、ここ数年、新資料の増加によりまして新石器時代の様子も大分はっきりしてまいりましたし、また、編年の大綱もできつつありますので、今後は研究を深化させる段階にきていると考えます。そのためにはさらに資料を集め、綿密な検討を加えねばなりませんが、重要な問題の多くはむしろ今後に残されているというのが現状でございましょう。

大変急ぎましたために、研究の現状や今後の課題など正しくお伝えできたかどうか不安でございますけれども、皆様の忌憚のないご批判がいただければ幸いでございます。（一九七八・十・二）